

# 特別支援教育分野における 大学の地域支援に関する実証的研究 —子どもの発達を支援するためのテレビ会議 システムを利用した地域発信の提言—

和歌山大学教育学部特別支援教育学教室

小野次郎、江田裕介、武田鉄郎  
古井克憲、山崎由可里

★特別支援教育学★



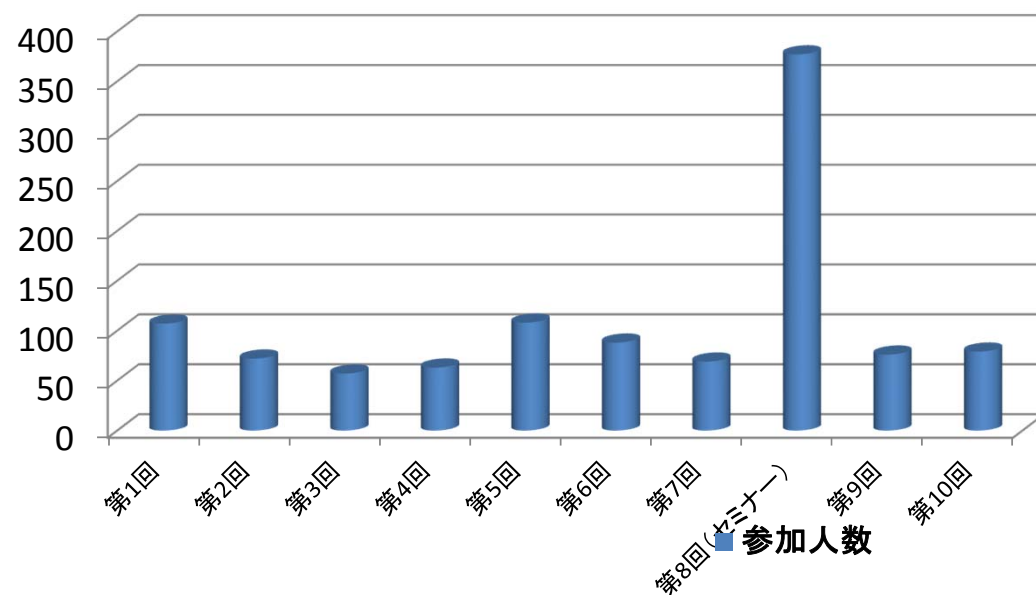
和歌山大学岸和田サテライト  
神谷千春

和歌山大学システム情報学センター  
川橋 裕

# 本研究の目的、方法、成果

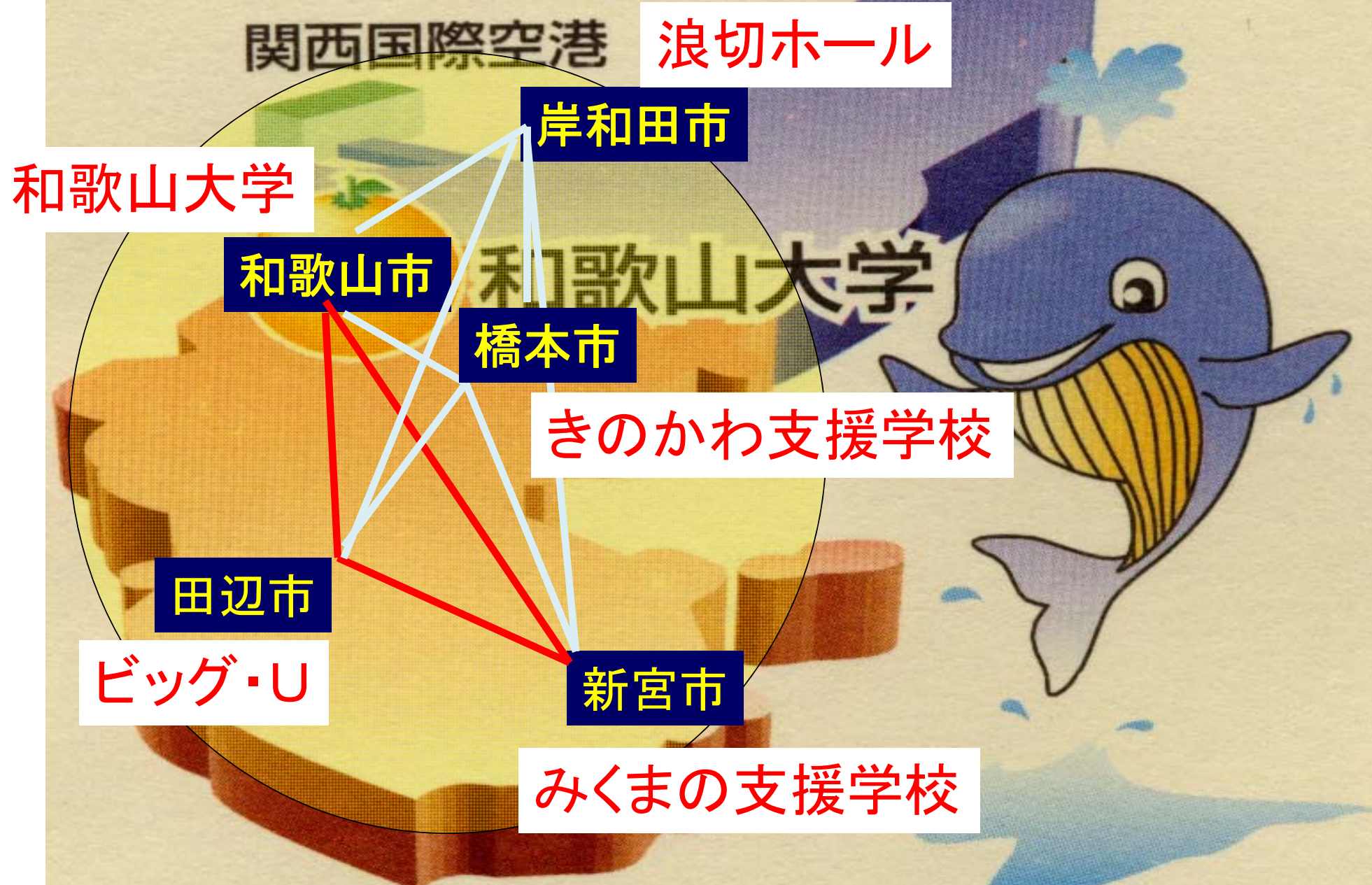
- 教育学部特別支援教育教室の5名の教員が、地域連携・地域支援のかかわりの中で行っている研究を、さらに地域に根付かせることを目的とした。
- 地域の医師会・児童養護施設・児童デイサービス・難病支援センター・障害者支援機関などと連携し、研究を進めた。
- 得られた情報は、和歌山大学システム情報学センターを発信基地として、TV会議システムを利用した和歌山大学特別支援教育コーディネーター  
フォーラムとして、県内3か所  
と岸和田サテライトに配信した。
- TV会議参加者数は、  
10回合計で1,000人を超え、  
第8回として行った県教育委員会  
との共催セミナーにおいて、TV  
システムによる研修効果に関する  
アンケート調査も行った。

参加者数 10回合計1096名



# TV会議システムを用いた他地域への配信

平成23年度からは、以下の5か所での配信を始めました



# まとめ

- テレビ会議システムを用いたフォーラムにおけるアンケート調査から、①「参加者の意識改善」や「専門知識の伝達」に関しては、発信会場とテレビ会議場で差はなかったが、②「総合的な満足度」では、発信会場である和歌山大学の方が高かった。
- テレビ会議システムは、有用な手段であるが、テレビ会議場における「満足度」をさらに向上させるためには、さらなるアイデアが必要である。
- 大学の教員が行っている地域との実践研究を、テレビ会議システムを用いて和歌山県下に情報提供ができたことにより、大学と地域の連携がさらに深いきずなになっていくことが、期待された。

# テレビ会議システムを使用した研修の効果

—発達障害児の教育に対する意識の変化に焦点を当てて—

## ■研究目的

2012年8月23日のフォーラム

**「発達障害のある子どもたちから  
学ぶこと～自尊感情を育むために」**

前後で行ったアンケート調査の分析を通して、以下3点を明らかにする。

- ①発達障害児の教育に対する参加者の意識の変化
- ②テレビ会議システムを使用した研修の効果
- ③大学との連携に対する意識とその変化

## ■調査の方法

・参加者377人うち回答者335人(回収率88.9%)

会場	幼稚園 教職員	小学校 教職員	中学校 教職員	高等学校 教職員	特別支援 学校教員	一般	合計
和歌山大会会場	2	63	11	14	46	48	184
テレビ会議会場							
田辺会場	1	31	0	1	9	7	49
ビッグU							
橋本会場	0	4	3	4	38	10	59
きのかわ支援学校							
新宮会場	0	17	9	5	28	4	64
みくまの支援学校							
岸和田会場				21			21
浪切りホール							(岸和田会場は参加者人数のみ記録)
合計	3	115	23	24	122	69	377

- 調査内容及び分析
- ✓ プロフィールの集約
- ✓ 発達障害児の教育に対する意識
- ✓ 大学との連携に対する期待感
- ✓ 参加者の満足度

因子分析  
統計的検定

# 1. 発達障害児の教育に関する参加者の意識と フォーラムによる研修効果

Table 1 アンケート「発達障害児の教育」に関する  
質問項目の得点の因子分析

質問項目 番号	因子 負 荷 量			
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子
Q14	0.856	0.081	-0.103	-0.045
Q16	0.815	0.089	-0.021	-0.096
Q1	0.788	0.034	0.119	0.132
Q18	0.785	0.161	-0.118	0.056
Q12	-0.524	-0.133	0.162	-0.051
Q15	0.185	0.892	-0.012	-0.022
Q17	0.21	0.845	0.1	-0.061
Q19	0.151	0.841	0.069	0.065
Q13	-0.129	0.567	0.301	0.173
Q2	0.101	0.444	0.361	0.157
Q11	-0.017	0.192	0.63	-0.03
Q10	0.172	-0.155	-0.525	0.258
Q4	0.097	0.178	-0.47	0.248
Q3	0.451	-0.003	0.461	0.413
Q5	-0.072	0.215	0.444	0.174
Q9	0.062	0.04	-0.064	0.674
Q8	0.121	0.078	-0.123	0.65
Q6	-0.113	0.259	0.232	-0.36
Q7	-0.339	0.259	0.232	-0.338
寄与率	18.05%	15.84%	8.85%	8.15%
累積寄与率	18.05%	33.89%	42.74%	50.90%

Table 2 4つの因子の抽出

## 第Ⅰ因子『障害理解の自信』

発達障害の特性理解や、指導法、接し方などについて、どの程度自信を有するか。

## 第Ⅱ因子『専門知識への関心』

発達障害児の指導に関する専門的な知識に対してどの程度関心を有するか。

## 第Ⅲ因子『適切な支援の態度』

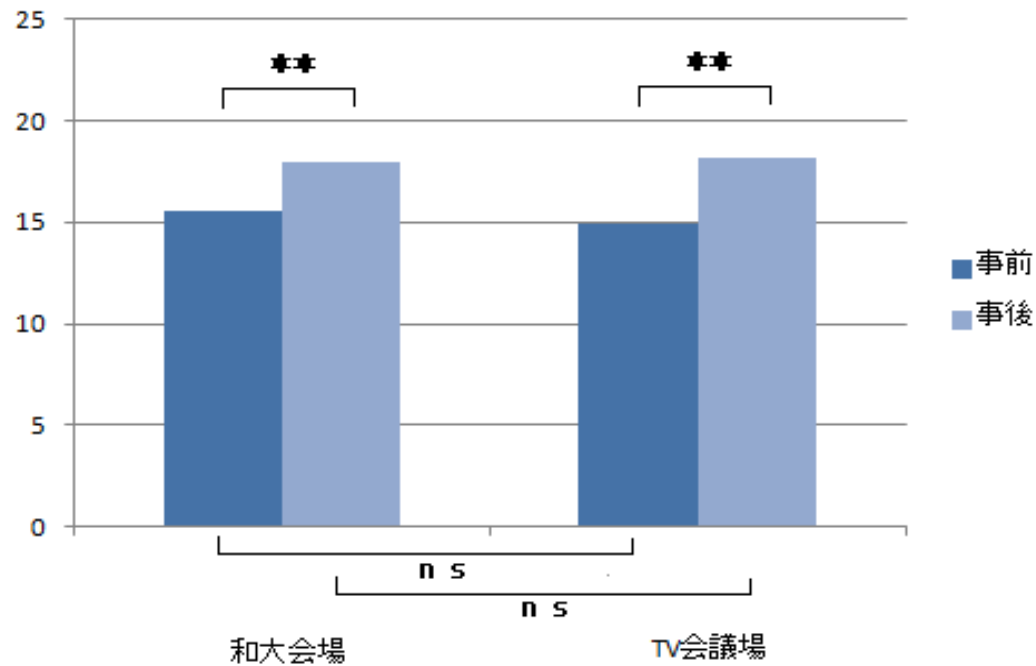
ほめる、しかるなど、周囲の対応がどのように影響するか、支援の方針を考えられるか。

## 第Ⅳ因子『直接的なかかわりへの意欲』

自分自身が発達障害児の指導を直接担当してもよいと思うか、自分では担当せず、なるべく専門家にまかせたほうがよいと思っているか。

## 第 I 因子『障害理解の自信』 研修前・後における因子得点の比較

事前には両会場の得点に有意差はなかった。  
事後には、和大会場 ( $t=7.95(df:166), p<0.01$ )、  
テレビ会議場 ( $t=10.36(df:154), p<0.01$ ) とともに、  
得点が有意に高まった。  
すなわち、『障害理解の自信』を高める効果が  
両会場で同等に認められた。

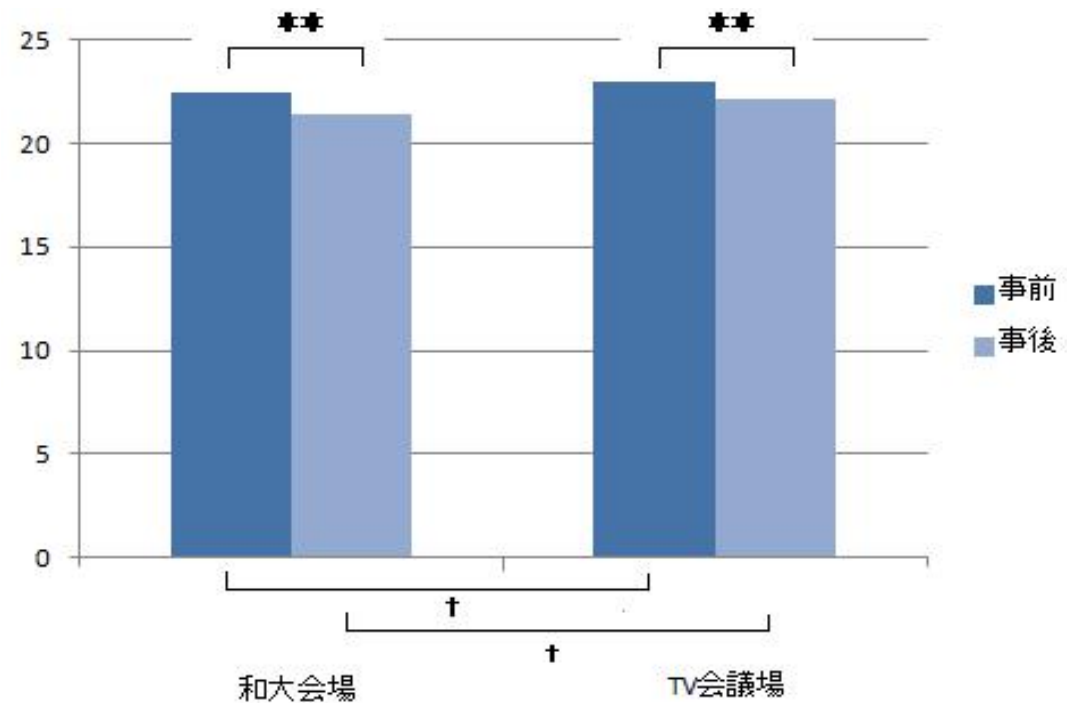


ns>0.10 +0.10>p>0.05 \*p<0.05 \*\*p<0.01

Fig 1 第 I 因子における因子得点の比較

## 第 II 因子『専門知識への関心』 研修前・後における因子得点の比較

事前、事後ともに会議間で得点差に有意傾向が  
あり、テレビ会議場の得点がやや高かった。  
事後には、和大会場 ( $t=4.07(df:170), p<0.01$ )、  
テレビ会議場 ( $t=3.52(df:157), p<0.01$ ) とともに得点が  
有意に低下した。得点の低下は『専門知識への関心』の満足度を表すと考えられる。

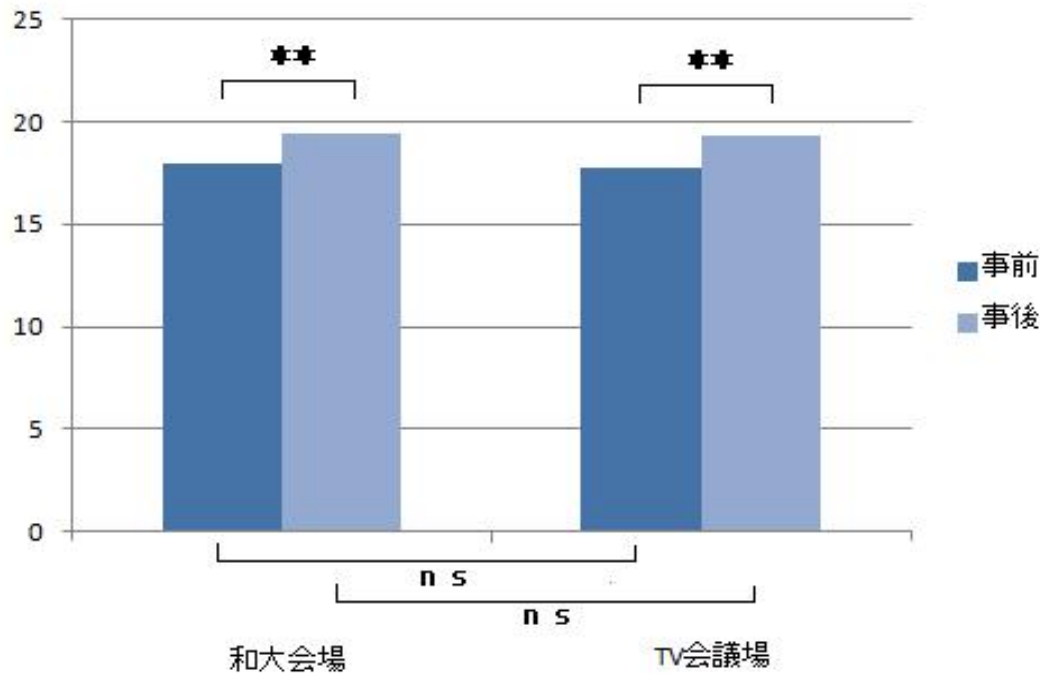


ns>0.10 +0.10>p>0.05 \*p<0.05 \*\*p<0.01

Fig 2 第 II 因子における因子得点の比較

### 第Ⅲ因子『適切な支援の態度』 研修前・後における因子得点の比較

事前には両会場の得点に有意差はなかった。  
事後には、和大会場 ( $t=7.62(df:164), p<0.01$ )、  
テレビ会議場 ( $t=9.64(df:158), p<0.01$ )ともに  
得点が有意に高まった。  
すなわち、『適切な支援の態度』を高める効果が  
両会場で同等に認められた。

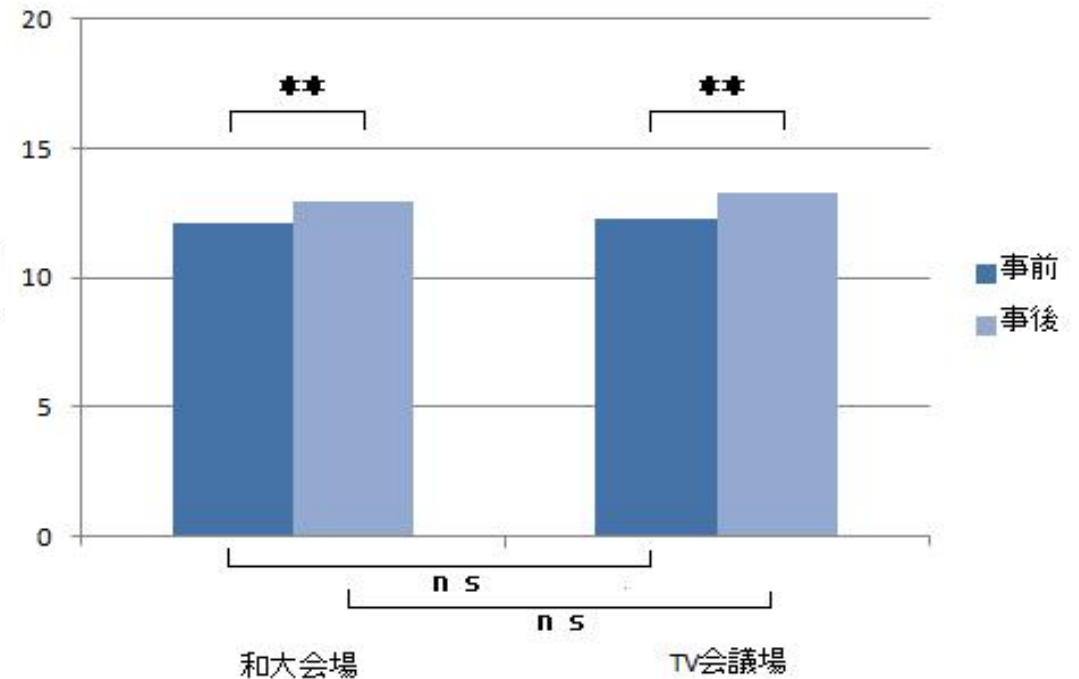


ns>0.10 +0.10>p>0.05 \*p<0.05 \*\*p<0.01

Fig 3 第Ⅲ因子における因子得点の比較

### 第Ⅳ因子『直接対応への意欲』 研修前・後における因子得点の比較

事前には両会場ともに得点が低く、会場間での  
得点差はみられなかった。  
事後には、和大会場 ( $t=7.95(df:166), p<0.01$ )、  
テレビ会議場 ( $t=10.36(df:154), p<0.01$ )ともに  
得点が有意に高まった。  
すなわち、『直接対応への意欲』を高める効果が  
両会場で同等に認められた。



ns>0.10 +0.10>p>0.05 \*p<0.05 \*\*p<0.01

Fig 4 第Ⅳ因子における因子得点の比較



## 2. フォーラムの参加者における 大学の教育・研究に対する意識の変化

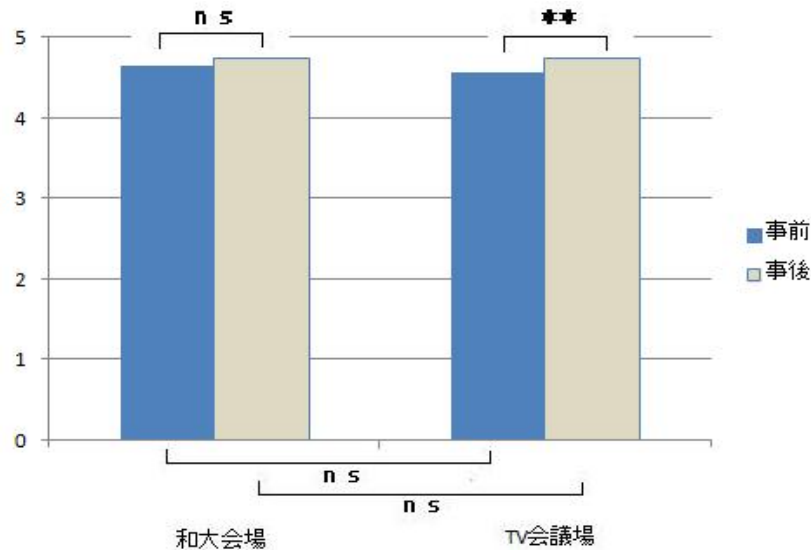


Fig 5 『大学との連携効果への期待感』得点の前後比較

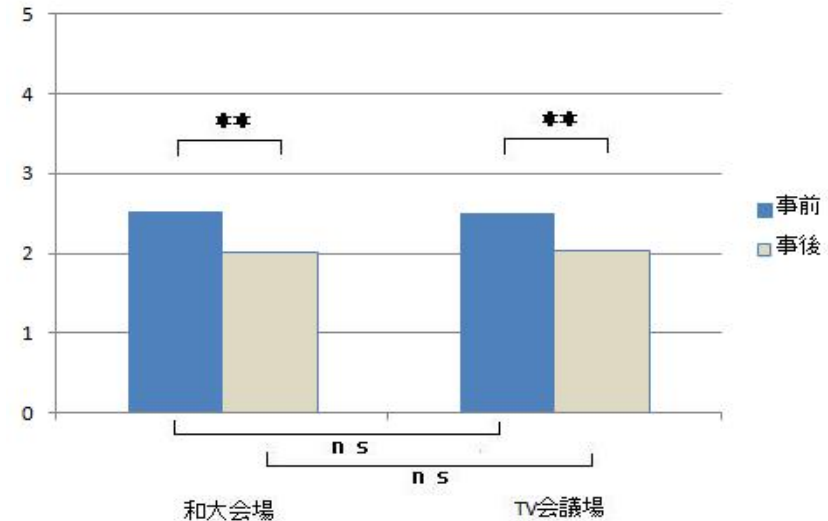


Fig.7 『学校現場の教育問題との距離感』得点の前後比較

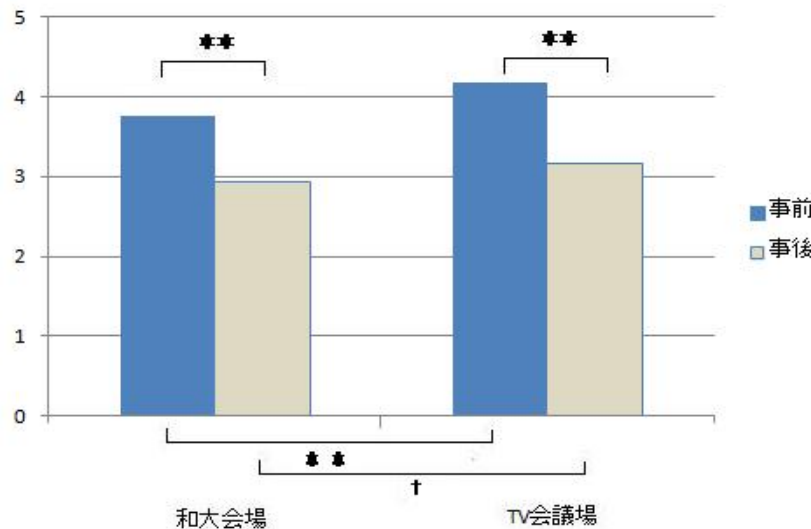


Fig.6 『大学の研究活動への疑問』得点の前後比較

『大学との連携効果への期待感』は、テレビ会議場で事後に得点が高まり、和大会場では変化がみられなかった。『大学の研究活動への疑問』は、両会場で事後に得点の下がり、その程度はテレビ会議場で有意に大きかった。『学校現場の教育問題との距離感』は、両会場で事後に得点の低くなり、会場間での得点に差を認めなかった。

大学の教育・研究に対する意識の変化は、テレビ会議場の参加者においてより大きいといえる。

### 3. 参加者の満足度

- 「総合的な満足度」(t(298.9)=3.29, p<.01)
- 「画質」(t(296.7)=2.87, p<.01)
- 「音声」(t(298.2)=4.85, p<.01)
- 和歌山大学会場の得点がテレビ会議場より有意に高かった。

Table 3 フォーラムに対する参加者の評価

	会場	N	平均値	標準偏差	t検定
総合的な満足度	和歌山大学会場	165	4.64	0.61	} **
	TV会議場	159	4.38	0.79	
画質	和歌山大学会場	158	3.70	0.70	} **
	TV会議場	159	3.43	0.91	
画面の大きさ	和歌山大学会場	158	3.62	0.79	n.s.
	TV会議場	157	3.59	0.79	
音声	和歌山大学会場	158	3.77	0.78	} **
	TV会議場	159	3.28	1.00	
今後の参加希望	和歌山大学会場	160	4.32	0.89	n.s.
	TV会議場	159	4.45	0.67	

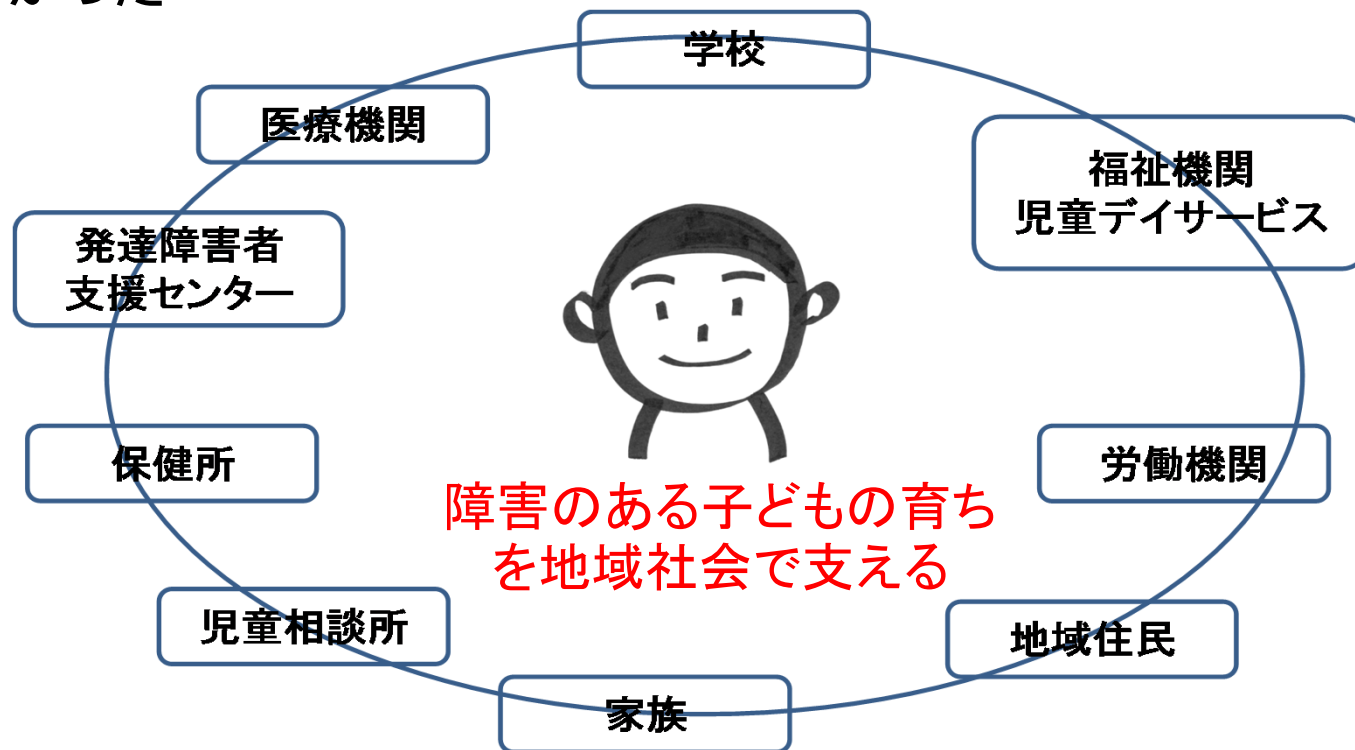
n.s. > .01, \*\* p < .01

- ■まとめ
  1. テレビ会議システムは、研修の目的である、参加者の意識改善や専門知識の伝達に関して、直接会場と同等の効果が認められた。
  2. 一方、参加者の満足度は直接研修に参加する和大会場の方が高かった。
  3. 大学との連携に対する期待を高める効果や、大学の教育・研究への理解を促進する効果は、遠距離で研修を受けることができるテレビ会議場においてより大きくみられた。

# 児童デイサービス「クロネット」との連携による研究報告

担当:古井 克憲

- 学校教員へのアンケート調査より、教員は関係機関と連携し、地域で子どもの育ちを支援することを求めており、放課後支援を行う「児童デイサービス」との連携も必要としていることが明らかになった(古井・神谷 2012)
- 和歌山県内の児童デイサービスの実態調査より、発達障害のある子どもが利用している児童デイサービスがあるものの、さらなる体制整備が必要であることが分かった



# 福祉機関を通じた就労を含む卒業後支援 -青年学級、自立訓練事業など- 担当:山崎由可里

地域連携先:社会福祉法人麦の郷等

＜取り組みの内容＞

## 1.障害者青年学級への支援

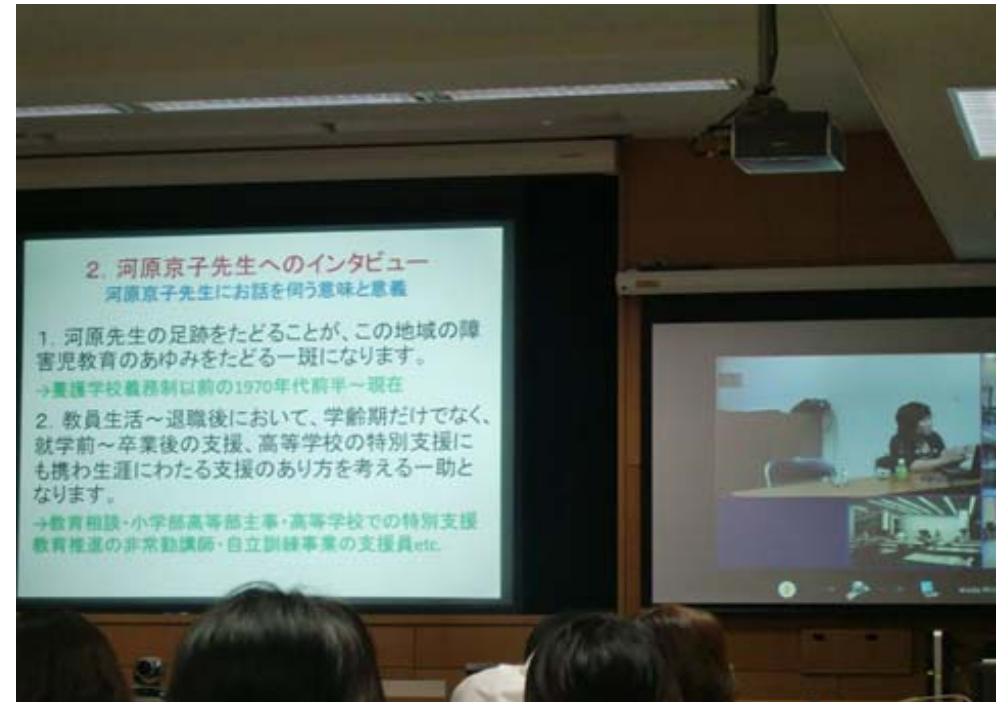
「すばらしきなかまたち」へ参加し、参加者へのインタビューを通して、障害者青年学級が持つ意義と役割について、生涯にわたり「楽しい時間」を共有する、「仲間づくり」「安心出来る空間」=居場所づくりという「3つの間」があることを明らかにした。

## 2.特別支援教育フォーラムの共催

特別支援教育フォーラムの企画に、和歌山から全国に発信している「学ぶ作業所(自立訓練事業)」とやしま学園高等専修学校の教職員の実践研究を取り入れ、それぞれの成果と課題について共同発表した。

## 3. 大学院生・専攻科生による観察参加実習

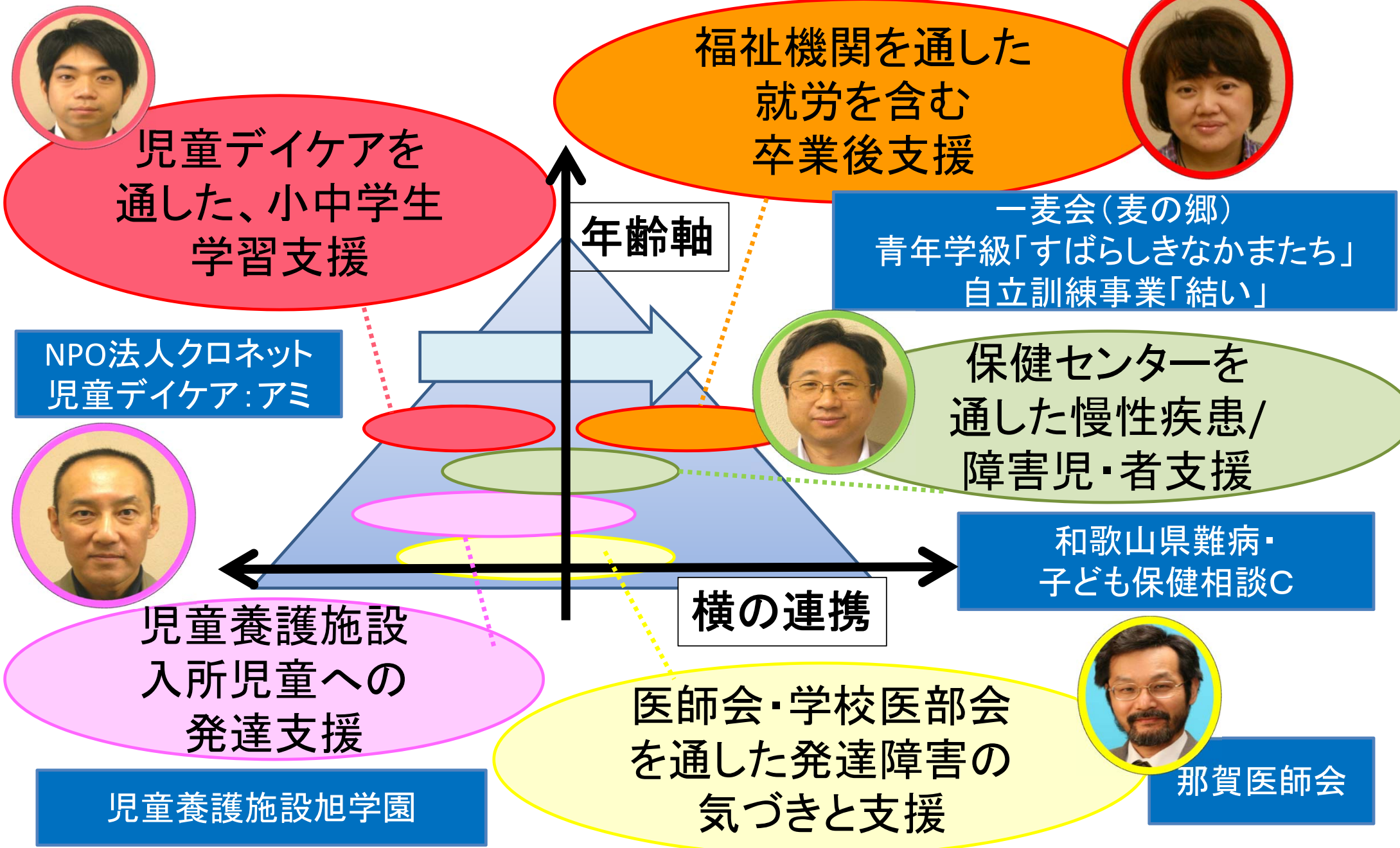
支援学校高等部卒業後の多様な支援の実態について、自立訓練事業「シャイン」、エコールKobe、やしま学園高等専修学校専攻科で観察参加実習を実施した。



2011年9月河原京子氏(元みくまの支援学校教諭・自立訓練事業ステップ指導員)との共同発表

本研究に関連して、「特別支援教育の基礎知識＜キャリア教育＞」『みんなのねがい』2012年1月号、など発表

# 発達障害・病弱・知的障害・虐待など それぞれの子どもへのニーズにあった連携支援



# 和歌山県難病・子ども保健相談支援センターとの連携

「病気の子どもと家族のためのガイドブック」もとに  
「病気の子どもの相談ー学校生活を中心にー」を作成  
県内の各保健所、母子保健担当課、教育センター等に配布  
担当：武田 鉄郎



**SOMEDAY**

病気の子どもの相談  
ー学校生活を中心にー

子どもたちの健やかな成長を願い、支援して行くために

## はじめに

①はつきりせず、慢性的な経過をたどる病気のことを難病と言います。  
②を抱える長期療養児やその家族は、病気に対する不安や経済的な負担等により家庭生活や社会生活に大  
きな影響を受けます。また、療養・治療だけでなく、すこやかに成長するためにはさまざまな問題を解決す  
る必要があります。とりわけ学齢児にとっては、学校生活の問題が大きなウエイトを占めます。  
③では、学校生活を中心としたQ&A、病気の子どもや子どもに関わる方を対象としたデジ  
タルブックの紹介、子どもの福祉制度についてまとめましたので活用ください。

## 学校生活に関するQ&A

④学級について  
⑤期入院する予定ですが、院内学級に入らなければならないか迷っています。なぜならば転校の手続きをし  
てはならず、それには抵抗があります。

⑥子さんの教育の継続性から考えますと、学籍を移動し院内学級で学ぶことをお勧めします。転校の手続  
は主に学校側が行います。

⑦齢期は、基本的な生活習慣が形成され、家庭内の生活が多くなる時期です。友人との間で競争したり、安  
たり、協調したりして関係の拡大を図る時期であり、社会性が育つ時期です。特に、学校生活での適応  
が大きな意味をもち、学校生活に関わる問題が多くなります。入院や治療のため学校を欠席しがちにな  
り、学習に遅れがたり、クラス内で孤立しがちになったり、仲間から取り残されるといった恐怖感や  
不安が高まる場合があります。また、長期にわたって入院する場合、病院という隔離された環境から、経  
路が生じ、仲間関係や社会適応の構築が未発達になることもあります。学習の遅れや行動面や情緒面  
で問題に対応するには、医療者、保護者、教育関係者等がお互いに連携を密に図り、継続的に教育を行っ  
ていくための支援が必要です。

⑧時期は、心身の成長・発達が著しい時期で、心理的に親から独立して自我同一性を求め、社会性をづけ  
る基礎を築く時期です。理想的な自分のイメージと自分の容姿や能力を比較することで劣等感をもち  
さまざまな葛藤がおきやすい時期であり、自分の将来の生活について考えを深める時期でもあります。  
⑨時期に慢性疾患をもつことは、学業の遅れや欠席などの学校生活上の問題や副作用への不安、ホテ  
ィンジに関する劣等感、病気の予後や自分の将来についての不安などを抱くようになり、複雑な心理社会的  
問題を抱えるようになります。時には、保護者や医療者に反発し、治療拒否にまで発展することもあり  
ます。自立という課題達成のために病気を抱えながら様々な葛藤を経験します。

⑩病気を抱えながらも自立を目指して努力している子どもたちが、学校教育とつながりを持ち続けることは、  
⑪の遅れを取り戻し学力を補うばかりでなく、心理的な安定を得てひいては自主性、積極性、社会性を養  
うることにつながるなど心理的、社会的発達にきわめて重要な意義をもちます。さらに自ら病気を管理  
しようとする力を養い、入院中の生活の質（QOL）を向上させることにもなります。

⑫本における病気の子どもの教育は、特別支援学校、病弱・身体虚部特殊学級（病院内にある場合は、  
⑬、院内学級と呼ぶ）、訪問教育により入院・治療を行っていても教育が継続されます。



和歌山県難病・子ども保健相談支援センターは  
難病患者・長期療養児が安心して暮らせる環境づくりを目指します

医療・福祉などの  
役立つ情報をお知らせします

就労についての  
不安や悩みの相談をお受けします

療養生活の  
不安や悩みの  
相談をお受けします

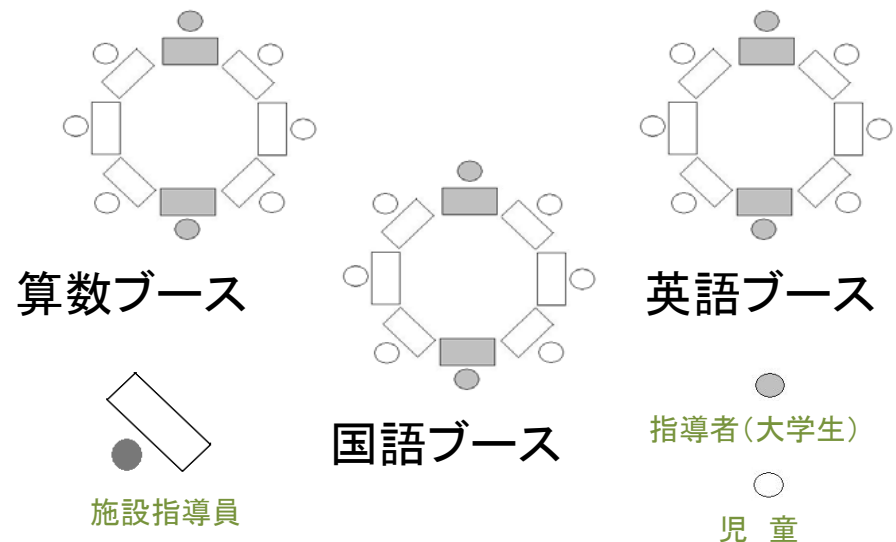
患者会・家族会・  
ボランティアの  
活動を応援します

保育所や学校に  
安心して通える  
お手伝いをします

# 児童養護施設と連携した児童の 発達支援に関する実践研究

担当：江田 裕介

- 地域連携：和歌山市旭学園  
(児童養護施設)
- 取り組みの内容：
  1. 和大学生による教育ボランティア活動
    - 施設入所児童(小学校5年生、6年生)を対象として、施設内において、週2日間、国語、算数等の教科学習の補習を行い、児童の学習意欲の向上と、基礎学力の定着と向上を図った。
  2. 大学院実践研究プロジェクトの共催
    - 臨床研究プロジェクトに施設職員による実践研究を取り入れ、成果発表の場であるフォーラムを共同で開催した。
  3. 大学院生、特別専攻科生による施設での観察参加実習
    - 児童養護施設と入所児童の実態理解のため施設での観察参加実習を実施した。



屋台方式の学習指導(教科ブースの配置例)

# 学校医参加による発達障害児童生徒の包括的支援 ～医師会と教育委員会の協働を通して～担当:小野 次朗

第16回  
**那賀地区市民公開講座**

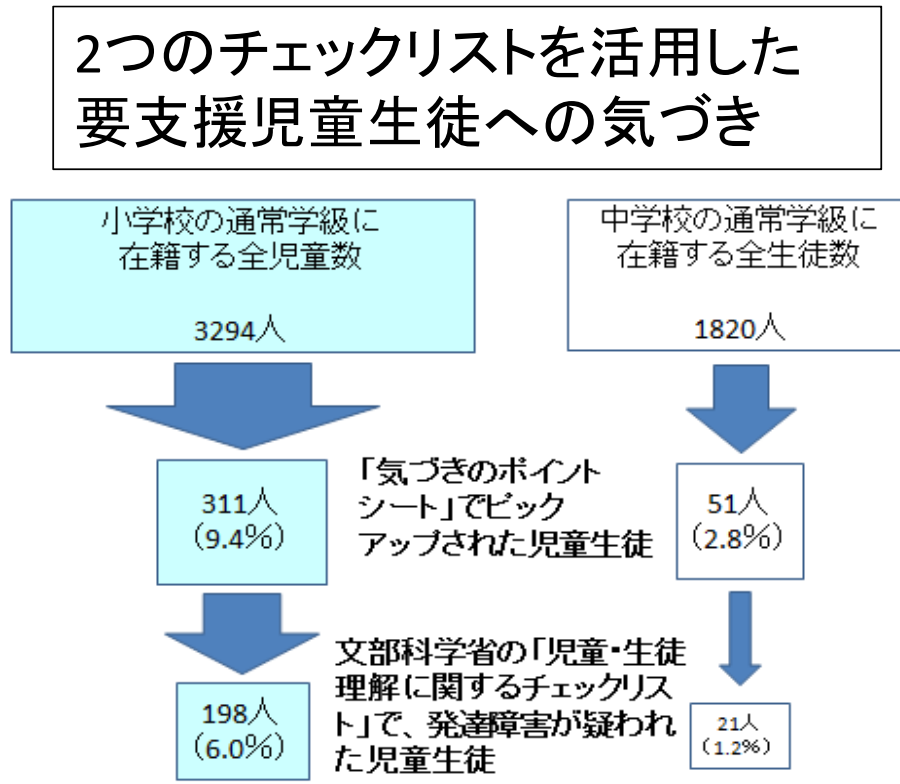
**発達障害と特別支援教育**

特別講演  
『子どもの発達障害と特別支援教育  
—医療と教育の連携の大切さ—』  
和歌山大学大学院教育学研究科教授 小野 次朗先生

パネルディスカッション  
峰 小児科 公立那賀病院臨床心理士 紀の川市教育委員会指導主事 紀の川市立竜門小学校 岩出市立山崎北小学校  
峰 暉夫先生 吉村 悠子先生 嘉本 知子先生 山路 公美子先生 山田 秀美先生

日時 平成24年2月5日(日)  
13:00開場 13:30開演  
会場 ホテルいとう 4階 鳳凰の間  
参加費 無料 (参加申込み不要です)

お問合せ 那賀医師会 TEL 0736-77-3151  
主催 那賀医師会  
後援 岩出市教育委員会 紀の川市教育委員会 公立那賀病院  
共催 日本イーライリリー株式会社



第20回 **那賀地区市民公開講座**  
発達障害と特別支援教育

地域で守ろう!! 子どもの自尊感情  
特別講演  
子どもの発達障害と特別支援教育  
—自尊感情を育むための地域連携の在り方—  
講師 和歌山大学大学院教育学研究科教授 小野 次朗 先生

パネルディスカッション  
司会 那賀医師会長 西岡 正好 先生  
峰 小児科 和歌山つくし医療福祉センター臨床心理士 紀の川市教育委員会指導主事 紀の川市立竜門小学校 和歌山県立紀伊コスモス支援学校 紀の川市役所発達相談員  
峰 暉夫先生 深谷 薫先生 嘉本 知子先生 山路 公美子先生 溝端 英二先生 金川 晃子先生

日時 平成25年 2月23日(土) 13:30開場  
14:00開演  
会場 ホテルいとう 4階 鳳凰の間  
主催 那賀医師会  
後援 岩出市教育委員会・紀の川市教育委員会  
公立那賀病院  
共催 日本イーライリリー株式会社

参加費 無料  
お申し込みは不要です

お問い合わせ先 那賀医師会 ☎ 0736-77-3151 (午前10時～午後5時まで、土・日・祝日は除く)

図4 2つのチェックリストによって気付かれた児童生徒数

これらの発達障害が疑われる  
要支援児童生徒に関して  
学校医も参加した検討を行う

平成24年度実施

平成25年度実施  
予定

市民公開講座を通じた障害に関する知識の普及